**仏教は** (エッセイ)

2010-11　西　宏

仏教はただ、心の問題です。

仏教を他の宗教と区別して知ること。

葬式が仏教ではありません。

苦と涅槃、出発点と目標。

仏教を知る本。

宗教そのものが、心だけの問題であると知ること。心を制御することが修行です。

宗教に身体的、経済的、政治的解決を要求するのは間違いです。ただ、心が豊かになれば身体にも影響して健康になれる、あるいは冷静な思考は経済的、政治的な問題に解決をもたらすかもしれません。

また政治と宗教は相容れません。たとえば、イエスが羊飼いをしていて、もし１頭が行方不明になったら、彼は残りの９９頭を捨て置いて、その１頭を探しに行くと言われています。これでは政治になりません。最大多数の最大幸福を願うのが政治だとすれば、イエスのこの行動は正反対です。「あなたを見捨てない」のが宗教です。

宗教は正義の根拠であることを知らなければなりません。「正しい」と言うことは、どの宗教においてそう言えるかであって、別の宗教ではそれは悪になることがあります。無宗教ということは、正義感に根拠が無いと解釈されても仕方がありません。

仏教を他と区別して知ること。

私が仏教の勉強を始めた時、まず除外しなければと思ったのは、キリスト教的思考でした。これは戦後にほぼ強制的知識として植え込まれたのではないかと思います。つぎに道教、儒教、神道からの分離です。これらはどれも宗教ですから似通った考えもたくさんありますが、分離しておかないと仏教の精神が崩れます。仏教をキリスト教用語で表記すると大きな誤解を生みます。キリスト教用語を使えば、必然的に有神論的に考えますから。仏教の造物主のいない無神論とは思考の背景が違うのです。

同じく仏教を名乗っていても阿弥陀信仰と釈迦仏の禅宗は考え方が違います。阿弥陀信仰は人間とは何かを中心に分析します。死ねば極楽か地獄に行きます。禅宗は、禅によって修行し悟りを目指します。道元は、地獄極楽は人が生きている間に、すなわち、この人生で起こる現象だとし、誰も報告してこない来世のことは考えません。

私は、釈尊当時の支配宗教であったバラモン教も排除すべきだと思いますが、そうすると、地蔵菩薩、弁財天をはじめ仏教に深く食い込んでいる多数の神々の意味がわからなくなります。釈尊の仏教としては、その方が正当なのですが、みなさんは、仏教として民衆の信仰を集めている神々が説明されていないと感じるでしょう。仏教はバラモン教の鬼子であるにもかかわらず。釈尊はすべての物体、現象は因縁によって合成されたもので、バラモン教の言う固定的に永続する、例えば魂などは無いと断定しました。

なお、釈尊以外には歴史上に存在した如来、菩薩、明王、天は存在しません。龍樹菩薩（インド人）、行基菩薩（渡来系日本人）などは実在しましたが、本尊として祭られることは一般的にはないようです。日本人で信仰の対象になったのは聖徳太子と空海です。

葬式を指導することが仏教ではありません。葬式そのものは、民族的死者儀礼ですから、宗教でなくても執行できます。日本では、貴族の仏教である天台宗、真言宗がおとろえた平安後期に、加持祈祷をしない鎌倉時代の仏教が葬式によって収入を得るようになったということです。また江戸期には寺院が行政の戸籍係を務めていたので、その檀家制度が現在も習俗として継続しています。霊魂を認めない浄土真宗、霊魂の消滅を言う曹洞宗が、葬式はともかく、その後の追善供養を言うのは矛盾ではありませんか。

葬式、法事に読み上げられるのがお経です。しかしこれは儀式の形式であって、経典に力があるわけではありません。経典は仏教の指導書です。説明書であり、勧誘の書でもあり、説話、物語も含みます。難しいのは、古い中国語で書いてあるからで、聖書のように常に現代語訳をすれば、内容が理解できないことはないはずです。どの経典にも自画自賛の部分があって興ざめします。経典をありがたがるのは違うでしょう。その経典を作った人に感謝すべきです。なお大乗と呼ばれる経典は西暦紀元前後から作られ始めたもので、内容に釈尊が登場しても、目撃談ではありません。また経典の作者は記録されていません。すべて釈尊の指導を記録している建前ですから。

釈尊は人生を苦と見て、その克服を探求し、ついに縁起の法＝無我説にたどり着き、悟りを得ました。それは瞑想でのみ得ることのできる世界でした。釈尊は瞑想の指導をしましたが、全員が瞑想をできる環境にあるとは思っていなかった。そこで彼は、悟りにかなう生き方、利他，慈悲などを教えたのだと思います。

釈尊の論理は学ぶのに難しくはありません。難しいのは止観や座禅などで悟りを得ることです。いつ見えてくるかわからない悟りを待つことは容易ではありません。仏教の煩瑣哲学と言われる中期仏教は、論理を進めすぎて袋小路に迷い込んだように見えます。これに長い年月をかけて理解しても、悟りに至ることはないでしょう。

仏教の理想は悟り、すなわち生死を超えた平安、これが涅槃です。

すべて仏教を紹介する本、学習を伝える書物は、既成の論理を述べるだけで、それに対する批判がない。たとえば、十二因縁、五大などの分け方に批判的記述を見たことがありません。黙って従うのが宗教的修行ではあっても、学問仏教としては、たとえ最終的には肯定になっても、批判的評価があってしかるべきです。

仏教を理解するのには、さまざまな出版物がありますが、渡辺照宏の岩波新書３冊

「仏教」「日本の仏教」「お経の話」が冷静に書かれていると思います。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上